

なぜ人間は悔い改めによつてでは救われないのか

——アタナシオス『言の受肉』第七章の解釈——

安井 聖

序論

アタナシオスは『言の受肉』第七章において、人間は悔い改めによつて墮落の結果である死への腐敗から不滅へと回復することはできない、と論じている。A・ラウス¹はこの第七章の議論を重要な論拠としながら、次のように論じている。すなわち悔改めが人間にとつて腐敗しない生へ立ち戻るために不十分であるとする『言の受肉』第七章の主張は、人間の贖罪と救済の問題に関して『異教徒駁論』と『言の受肉』との間の相違を決定的に示している。『言の受肉』には『異教徒駁論』に見られるような人間の

観想による救済の獲得という理解は見出されず、人間の救済において言の受肉²が中心的な役割を果たしている。『異教徒駁論』ではプラトン主義の伝統に基づく観想の理解によつて人間の魂が捉えられており、魂は神的事物との本質的同一性をもつものであり、その魂が観想によつて神との結合を成し遂げることができる。ところが『言の受肉』³ではそのような理解は一変して、魂は無から創造されたものであり、全く神の恵みに依存しており、観想はもはや魂が神化するための手段ではなく、観想による救済という考え方はそれ以後のアタナシオスの作品の中に姿を見せなくなる。このように『異教徒駁論』は人間には救済の能力が内

在していると考えているが、『言の受肉』は人間を全く悲観的に受け止め、ただ受肉した言だけが人間を贖うことができる」と理解している。そしてラウスは、このような両書の間の変化を、アタナシオスは『異教徒駁論』において新プラトン主義に一時的な関心をもったが、その後それを全く拒絶したのだ、と結論付けている。

このようにラウスは『言の受肉』第七章において、『異教徒駁論』とは異なつた人間理解と、その人間理解に土台した救済論が展開されると主張しているが、果たしてそのようにこの第七章の議論を解釈してよいのであろうか。筆者はラウスによる第七章の解釈には重要な点が見落とされていると考えている。むしろこの箇所であタナシオスは、人間理解に関する議論をしていではなく、神がどのようなお方であられるかについて集中的に論じているものと思われる⁽²⁾。

そこで本論考では以下のような方法で論じたい。まずラウスの『言の受肉』第七章についての解釈における重要な問題点を指摘する。次にこの第七章と前後の箇所について詳細な注解を行なっているE・P・メイエリング⁽³⁾が、この箇所をどのように解釈しているかを紹介する。そして

そのメイエリングの解釈を検討しつつ、この箇所についての筆者の解釈を示したい。

第一章 ラウスの解釈の問題点

第一節 『言の受肉』第七章の前後の文脈の概観

アタナシオスは『言の受肉』第七章の直前までの箇所において、墮落した人間が減びに陥ってしまったために生じた一つのデイレンマについて論じている。人間はそもそも存在しないものであったが、人間が存在するようになることを妬むことをなさらない善なる神によって、神の像にかたどって創造された(『言の受肉』第三章三節)。さらに神は人間に律法を与えて、これを守ることによって神の像にかたどられた恵みに基づく不滅の生を歩ませようとなさつた(第三章四―五節)。ところが人間は律法に背き、それによって神の像にかたどられた恵みを失い、その結果本来の存在しないものへと戻ってしまい、死への腐敗に陥ってしまった(第四―五章)。

このような状況において、もし神が律法を破つた人間

への裁きとして人間を滅ぼされなかつたとしたならば、前もって違反に対する裁きを予告しておられた神ご自身の言葉を空虚なもの、偽りのものとしてしまうことになる(第六章二―三節)。そうなってしまうことは神の真实性にふさわしくない(第七章一節)。同時に人間の罪の結果ではあつたとしても、神が創造された人間が悪魔の企んだ欺瞞によつて滅んでしまい、そのようにして神のみわざが消滅してしまうとすれば、それは神の善性にふさわしくない(第六章四―一〇節)。こうして一方で神の真实性が賞かれるならば、他方で神の善性が成り立たない、というディレンマが生じてしまう、とアタナシオスは述べている。

まさにこのディレンマを乗り越える道として、アタナシオスが最初に取り上げるのが人間の悔い改めである(第七章二節)。けれどもアタナシオスは、人間が悔い改めによつて腐敗から不滅に復帰することはできないと述べ、その理由を二つ掲げている。

第一の理由として次のように述べている。「しかし、悔い改めが理に適うものとは神の目には映らなかつた。というのは、「それによつて、もはや」人々は死に束縛されないなら、「神は」真実ならざる者としてとどまることにな

るからである」⁽⁴⁾。つまり、もし人間が悔い改めによつて救われるならば、神の真实性が損なわれてしまうので問題である、と主張している。

さらに第二の理由として次のように述べている。「また、悔い改めは、本性に即することから解放するのではなく、罪を抑制するにすぎないからである。確かに、過失だけで、それに続く腐敗がなかつたなら、悔い改めで十分であつたらう。しかし、いったん違反が先に進んで、人々は本性に即する腐敗に捕えられてしまい、像にかたどられたという恵みを剥奪されてしまった以上、いったいどうすればよかつたのか」⁽⁵⁾。この箇所ではアタナシオスは、悔い改めは罪を抑制することしかできないので、人間が墮落によつて剥奪されてしまった神の像にかたどられた恵みを回復させるのに悔い改めでは不十分である、と主張している。

こうして人間が腐敗から不滅へと救われるために言が受肉されたのだということが、第七章四節から第一〇章の終わりに到るまで論じられていく。すなわち受肉された言がすべての人に代わつてご自分の肉体を死に渡され、言の内にはすべての人が死ぬことによつて、人間を腐敗に定める律法は破棄された(第八章四節)。言が人間の背負うべき死

に對する負債を返済してくださった(第九章二節)。こうして悔い改めでは保持できなかった神の眞実性が、受肉された言^{ロゴス}の代償の死によって貫かれた。また言^{ロゴス}が死から復活してくださることによって、腐敗へと向かつていた人間を再び不滅へと引き戻してくださった(第八章四節、第九章)。この言^{ロゴス}の死からの復活こそが、悔い改めでは果たすことのできなかった神の像^{かたち}にかたどられた恵みの回復を成し遂げたのである。

第二節 第一の理由を取り上げないラウスの解釈

ラウスはこの二つの理由のうち、第二の理由の箇所のみを取り上げて議論している⁽⁶⁾。すなわちこの箇所⁽⁷⁾で、人間が神の像^{かたち}を剥奪されてしまい、もはや神と結びつく能力が完全に失われたのだとアタナシオスが述べている、とラウスは理解する。そしてラウスはこの第二の理由を述べている箇所だけを取り上げ、『言^{ロゴス}の受肉』では人間が悔い改めによってでは救われないとするほどに、人間を全く悲觀的に受け止めている、としている。そしてこれを論拠にして『異教徒駁論』との違いを指摘しているのである。

しかし第一の理由は、なぜ人間が悔い改めによってでは救われないとアタナシオスが述べているかを理解するため、決して無視することのできない重要な発言である。すなわち悔い改めによって救われないのは、人間の側から神に近づく能力が失われたからだと述べるに先立って、神の眞実性が貫かれるためにも神がそれをお認めにならないのだ、とアタナシオスが主張しているのである。またアタナシオスは第二の理由についてよりも、第一の理由のために多くの分量を用いて議論をしていることも、重視すべき点である。

したがってなぜアタナシオスが悔い改めによってでは救われないと述べているかを理解するために、この二つの理由を共に取り上げる必要がある。これに関して筆者は第一の理由でアタナシオスが述べている事柄が、第二の理由で述べている事柄を規定していると考えている。つまり神の裁きの眞実性のゆえに人間は悔い改めでは救われないのであり、その神の眞実な裁きの結果として人間の側から神に近づく能力が失われたのだ、とアタナシオスは述べているものと思われる。

第二章 メイエリングの解釈

第一節 マルキオン派批判を背景に置いた解釈

①マルキオン派批判を背景に置くメイエリングの解釈

メイエリングはアタナシオスが『言の受肉』第七章に至る議論をしている時、マルキオン派を批判する意図を強く持つて議論しているのだと理解している。メイエリングはそもそも『言の受肉』全体を、「このアタナシオスの護教的著作は、反マルキオン派に強く彩られたキリスト教信仰の基礎講座である」^①と見なしている。

確かにアタナシオスは『言の受肉』第二章で、マルキオン派と思われる人々の主張を取り上げて批判している。「次に、異端者どものある者たちは、自分らのために、われらの主イエス・キリストの父とは別の、万物の形成者を案出している。彼らは自分らが言っていることに、まったく目が眩んでいるのである。実に、主ご自身がユダヤ人に言っておられる。『あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とお造りになった』。そして、こうも言われた。『それゆえ、人は父母を離れて

その妻と結ばれ、二人は一体となる』(『マタイによる福音書 第一章四一―六節』)。さらに、創造主に言及して言っておられる。『したがって、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない』(『マタイによる福音書 第一章六節』)。いったい、彼らはどこから御父とは無縁の創造といった考えをもってきたのか。ヨハネに従って、総括して言えば、『万物は〔言〕^②によって成った。〔言〕^③によらずに成ったものは何一つなかった』(『ヨハネによる福音書 第一章三節』)のであるに、いったいどうしてキリストの父とは別の形成者が存在するのか^④。

これほど強くマルキオン派批判の意図を『言の受肉』全体に見る研究者は、メイエリングの他には見られない。この点にメイエリングの解釈の際立った特質がある。例えばカンネンギーサーも第二章のこの箇所でもマルキオン派の主張を取り上げられているとするが^⑤、それ以降の議論においてアタナシオスにマルキオン派批判の意図が明確にあったと解釈していない。

②神の真实性とは神の首尾一貫性

メイエリングは神の真实性と神の善性とのダイレンマに

ついでに議論（『言の受肉』^{ロゴス}第六―七章）においても、アタナシオスがマルキオン派を批判しようとする意図があったことを読み取っている。メイエリングはそのように解釈する根拠として、アタナシオスが『異教徒駁論』第六―七章で論じている内容を取り上げる¹⁰。「異端者たちに属する者たちは、教会の教えから逸脱し、信仰を台無しにしてしまい、また悪がそれ自体単独の存在であるという誤った考え方をしている。彼らは自分たちのために、キリストのまことの御父に加えて、他の神を造り出す。それは生まれることなく造る者、悪の創始者、被造物の創造者である」¹¹。この箇所でもアタナシオスは、創造者をキリストの父なる神と対立する「悪の創始者」と見なすマルキオン派の神理解を批判している。そしてアタナシオスは、エイレナイオスやテルトゥリアヌスといった彼以前の反異端教父たちによるマルキオン批判の議論を踏まえているのだ、とメイエリングは主張する。そのようにマルキオンを批判する反異端教父たちの議論をよく知っていたアタナシオスが、『言の受肉』第六章以下においてもマルキオン派批判を意図しながら議論を展開しているのだ、とメイエリングは主張している。

そしてメイエリングは『言の受肉』第六章三節の「不条理であるのは、掟を破るなら人間は死によって滅びると定められたのに、違反の後にも死なずにいたなら、「神」の言葉は空しくされ、神が語られたことは偽りだったことになるからである」¹²という言葉を次のように注解する¹³。アタナシオスはここで、神が律法に基づく裁きを行なわなければ神が矛盾を抱え込む、という問題を取り上げている。エイレナイオスやテルトゥリアヌスによれば、マルキオンは旧約聖書に証言されているデーミウールゴスが矛盾を抱え込んでいることを批判した。そしてマルキオンは創造者の矛盾が、神が自ら制定した律法を破棄したことから生じたのだ、と主張した。アタナシオスもマルキオンも、神が矛盾を抱え込むことはあり得ない、という点で一致している。しかしマルキオンがこうした矛盾の解決を、キリストを遣わされた神とは区別された創造者に担わせたのに対して、アタナシオスは善なる創造者が矛盾を抱え込むことはあり得ないと述べる。アタナシオスはそのように主張することによって、ここで自覚的にマルキオン派批判を行なっている。

アタナシオスは『言の受肉』^{ロゴス}第七章一節でも同様の問題

に触れている。「しかしこのような事態に至らねばならなかったのではあるが、その反面で、死に関する法制の点で、神が真実なお方であられることを明らかにすることも神にとってふさわしいことであるという事態に直面する」¹⁵。ここでアタナシオスは、神が真実であられるからこそ自ら定めた律法に従わなければならない、と述べている。このようにアタナシオスが述べている律法に対する神の真实性を、メイエリングは神の律法に対する首尾一貫性 (Konsequenz) と理解している¹⁶。

そしてメイエリングは、アタナシオスが『言の受肉』第七章三節で悔い改めによって人間が救われることが神の真实性にふさわしくないと論じる時にも、そこで神の首尾一貫性が問われているのだと解釈している¹⁶。すなわち神は律法違反に対する裁きをお定めになった時に、悔い改めによって救われる可能性を予告していなかった。それなにもし墮落の後に悔い改めによる救いの可能性を認めるならば、神が首尾一貫していないことになってしまうと論じている。

③創造における神の善性から救済における神の善性へ
アタナシオスは神が律法に基づく裁きによって人間を滅ぼしてしまうならば、そこで神の善性ととのディレンマが生じてしまうということを『言の受肉』第六章四節以下で論じている。メイエリングは、アタナシオスが神の善性について論じる時にもマルキオン派を批判する意図を持っていたと考えている。

そこでメイエリングは、ことと同じく神の善性について論じている『言の受肉』第三章三節の議論が、この『言の受肉』第六章四節以下と内容的に深く結びついていると見なしている¹⁷。アタナシオスは『言の受肉』第三章三節で、『ティマイオス』二九Eの言葉¹⁸をパラフレーズして、次のように述べている。「実に、神は善なる方、否むしろ善の源泉である。善なる方として、「神は」いかなるものに対しても妬むことはない。それゆえに、いかなるものであれそれが存在することに対しても妬むことはなかった。」「神は」ご自分の言であるわれらの主イエス・キリストを通して、万物を存在しないものから造られたのである」¹⁹。メイエリングは、アタナシオスがこの『ティマイオス』の言葉を中期プラトン主義者とは異なった仕方

解釈し直して用いている、と述べている²⁰。すなわち中期プラトン主義者は、善なる創造者が善の源泉である善のアイデアに従属すると理解していたが、これに対してアタナシオスは父なる神こそ創造者にして善の源泉である、と理解した。そのような創造者の善性を、アタナシオスは『テイマイオス』の表現を用いて、被造物の存在を妬まないこと、というふうに言い表した。実はこの『テイマイオス』の言葉は、エイレナイオスのような反異端教父たちによって、マルキオン批判のために用いられていた²¹。したがってアタナシオスがこの『テイマイオス』を用いているのも、そこにマルキオン派批判の意図が働いている。すなわち創造者の善性を強調することによって、創造者の善性を否定するマルキオン派を批判している。

そしてメイエリングは、『言の受肉』^{ロコス}第三章では神の善性という言葉が人間の創造について用いられていたが、『言の受肉』第六章では人間の救済について用いられている、と理解している²²。つまり善なる神はマルキオン派のように創造を否定するお方ではなく、人間が存在することを妬まないその善性に基づいて人間を創造した。ところがその人間が神に背いたことによって滅びに定められてし

まう。このような事態についてアタナシオスは『言の受肉』第六章八節で次のように述べている。「造っておきながら、自分の業が減じるのを見過ごしにするのであれば、その怠慢のゆえに、神の善性よりも無力のほうさらけ出されることになる。それよりは、初めから人間を造らなかつたほうがよかつたであろう」²³。アタナシオスはこのように述べて、被造物についてのマルキオン派批判の議論を、人間の墮罪に向けての神の行為の議論へと拡大している²⁴。すなわちマルキオン派が主張するように善なる神が被造物を造ることをしないならば、神が創造に対して怠慢であり、無力だということになる。それと同様に神が滅びに向かう人間を救うことをしないならば、救済に対する神の怠慢と無力がさらけ出されてしまう。このように創造に対してだけでなく、救済に対しても、善なる神が怠慢であり無力であると見なされてよいのか、という議論は、テルトゥリアヌスやエイレナイオスがマルキオンを批判する際にすでに用いていたものである²⁵。

したがってメイエリングが理解する『言の受肉』^{ロコス}第六章四節以下で述べられている神の善性とは、滅びに向かう被造物を怠慢あるいは無力のために見過ごすのではなく、む

しろ被造物が救われることによって創造のわざを無に帰することをさせない神の姿に他ならない。

④人間のもろさのしるしである悔い改め

メイエリングは第七章四節に述べられている、人間が悔い改めによってでは救われない第二の理由を、次のように解釈している²⁶。アレクサンドレイアのフィロンや『ケルスス駁論』に見られるように、哲学の議論において悔い改め、あるいは心の変化は、それ自身が人間のもろさのしるしと見なされていた。アタナシオスはこうした哲学の議論を踏まえつつ、悔い改めが人間のもろさを表すものであるとするならば、悔い改めることによって人間が滅びを乗り越えることができるとは考えられない、とアタナシオスは理解していた。

ただしメイエリングはこの第二の理由に関しては、ごくわずかしか論じていない。

第二節 メイエリングの解釈の評価

メイエリングはラウスとは違い、『言ロフスの受肉』第七章に

論じられている、人間が悔い改めによってでは救われない第一の理由について、それ以前の議論の流れを踏まえつつ、自らの見解を丁寧に示している。その際メイエリングは、アタナシオスがマルキオン派批判を念頭に置きながら論じていると考え、そのパースペクティブから神の真实性と神の善性の意味を解釈した。

『言ロフスの受肉』第一章では、この書物が何を目指して書かれていくかが次のように示されている。「さて、幸いにして、真にキリストを愛する者よ、次に、われわれの宗教に即して、言ロフスの受肉について語り、われわれのための〔言ロフス〕の神聖な顕現について説明することしよう。これを、ユダヤ人は中傷し、ギリシア人は愚弄するが〔コリントの信徒への手紙Ⅰ第一章二節〕、われわれは礼拝するのである。むしろ、言ロフスの卑しい身分での頭れのゆえに〔言ロフス〕に対するよりいっそう大きく豊かな畏敬をあなたが抱くためである。実に、不信仰な者らに愚弄されればされるほど、〔言ロフスは〕ご自分の神性に対するよりいっそう大きな証しを提供されるのである。不可能なこととして人々に理解できないことを、〔言ロフスは〕可能なこととして明らかにされるからである。また、不当なこととして人々が愚弄することを、

『言は』ご自分の善性にふさわしいことと証明されるからである^{②⑦}。すなわち言の受肉が決して愚弄されるべきことではなく、神の善性にふさわしいことを論証しようとしているのである。そしてコリントの信徒への手紙Ⅰ第一章二二節をパラフレーズしながら、言の受肉を批判するユダヤ人、ギリシア人を意識してこれからの議論を進めていくと述べられている。それならばアタナシオスの論敵としてマルキオン派に偏って想定すべきではなく、もつと包括的に捉えるべきであると考えられる。

こうしてアタナシオスは言の受肉が神の善性にふさわしい出来事であることを論証するために、まずこの世界の創造と創造者である神について論じることから始めるのがふさわしいとして^{②⑧}、『言の受肉』第二章では自分とは異なつた世界の起源についての理解を批判的に取り上げていく。けれどもその第二章でもマルキオン派だけが取り上げられているわけではない。すなわち第一にエピタロス主義^{②⑨}、第二にプラトン主義^{③①}、そして最後にマルキオン派^{③②}について論じられている。

また『言の受肉』を通じて、マルキオン派に関係する固有名詞は一度も出てこない。だからこそ多くの研究者は

『言の受肉』第二章以外に、アタナシオスがマルキオン派を想定して論じている箇所があるとは考えていない^{③③}。そうなること『言の受肉』第七章を解釈する際に、メイエ

リングのようにマルキオン派批判の意図を強調し過ぎることには問題があるものと思われる。むしろアタナシオスがもつと多様な論敵を意識して、ここで議論していると理解すべきであると考えられる。

したがってメイエリングがマルキオン派批判の意図を背景にして解釈した神の真实性、神の善性についての理解そのものにも問題があると考えられる。すなわちマルキオン派批判の意図に偏って解釈したことによって、アタナシオスの神の真实性、善性の理解について見落としている側面があるのではないかと考えられる。

さらにメイエリングは、人間が悔い改めによってでは救われない二つの理由について論じてはいるが、両者の関係については論じていない。

第三章 神の主権を顕す神の善性と神の真実性

第一節 王としての支配を確立する神の善性

①『言の受肉』第三章三節の解釈をめぐって

メイエリングは、アタナシオスが『テイマイオス』を用いながら、中期プラトン主義者たちが善の源泉である善のイデアに従属する仕方でもミウルゴスの善性を捉えていたのに対して、創造者こそ善の源泉とした、と指摘している³³。この指摘は正しいと思われる。けれどもこの『テイマイオス』の言葉を、アタナシオスがマルキオン派批判のためだけに用いたかと言えば、そうではないのではないか。

アタナシオスはこの箇所では、神は被造物が存在することを妬まないことと、神が存在しないものから万物を創造されたという「無からの創造」の教えとを結びつけ、そこに見られる神の性質を神の善性と呼んでいる³⁴。そうなるここではマルキオン派のように善なる神と創造者を分離させるのではなく、創造者こそ善なる存在だとする考えをアタナシオスがここで述べている、とするメイエリングの

理解ではまだ十分にアタナシオスの真意を捉えきれないのではないか。すなわち善なる創造者が万物を無から創造されたことと述べることによって、アタナシオスは創造者なる神と被造物である万物との間の明確な区別を意識しつつ、神の他に被造物の源泉となり得るものではなく、神だけが完全な仕方でも被造物を支配しておられることを、この箇所では言おうとしているのである³⁵。したがってここで述べられている神の善性とは、被造物の存在を妬まないがゆえに創造してくださる神の姿を指していると同時に、被造物と共にその創造のみわざさえも唯一完全に支配しておられる神の姿をも指している。

このようにアタナシオスが無からの創造の教えによって、あらゆるものを支配しておられる神の姿を捉えていることは、『言の受肉』第二章の議論と第三章の議論との関係を見れば明らかである。アタナシオスがこのような無からの創造の教えによつて、『言の受肉』第二章で批判的に取り上げているプラトン主義の「先在した物質からの創造」³⁶を意識しつつこれを退けていることは言うまでもない。同時にアタナシオスは、エピクロス主義の「万物は自然発生的に成った」³⁷とする理解をも退けている。「実

に、「万物は」摂理を欠くものではないので自然発生的なものではなく、神は無力な方ではないので、先在した物質によるものでもない。むしろ、存在しないものから〔無から〕、いかなるかたちでも決して存在していなかったものから、言を通して神は万物を存在するようにされたことを教えている」³⁸。このようにアタナシオスは無からの創造の教えによって、先在した物質からの創造を教えるプラトン主義だけではなく、万物生成に何らの支配者も認めないために摂理を欠いたエピクロス主義の考え方を批判しているのである。無からの創造とは神こそ世界生成の唯一の源泉であるとする教えに他ならないのであり、したがってこの教えの前では偶然性を世界生成の源泉とするような考え方は当然退けられるのである。

またメイエリングは『ティマイオス』の解釈をめぐってのアタナシオスと中期プラトン主義との違いを指摘したが、『ティマイオス』の言葉と無からの創造の教えとの関係を積極的に論じているわけではない³⁹。しかしアタナシオスが中期プラトン主義とは違う仕方です『ティマイオス』を解釈した上で、それを無からの創造の教えと結び付けていることには深い意味がある。中期プラトン主義者は可視的

世界である「生成」の領域と不可視的世界である「存在」の領域との二元論を土台にしながら、至高者なる神と創造者なる神の善性を階層的に区別した⁴⁰。これに対してアタナシオスは創造者なる神を善の源泉と見なすことによつて、可視的世界と不可視的世界との二元論に基づいてではなく、神と被造物の明確な区別に土台して創造論を展開した。そしてアタナシオスはこのように神と被造物とを明確に区別することによつて、神が世界生成の唯一の源泉にして、あらゆるものを支配しておられることを言い表そうとしているのである。そしてこれはアタナシオスが無からの創造の教えによつて言おうとしたのと同じことなのであると解釈できる。

② 神の品位に関わることとして人間を救う神の善性

『言の受肉』第三章における神の善性の理解が、第六章と深く関わっているとするメイエリングの理解は正しいものと思われる。そしてメイエリングが言うように、第三章では創造における神の善性について論じたが、第六章では救済における神の善性へと議論を拡大させた⁴¹、ということも確かに言い得ることである。

しかしその場合にも、第六章でマルキオン派批判に限定されるような仕方では、救済における神の善性が論じられていくわけではない。アタナシオスは『言の受肉』第六章六節で次のように述べている。「他方、人々の怠慢によるにせよ、悪霊どもの欺瞞によるにせよ、人々に対して振るわれた神の技巧が消滅せしめられることは、大いに不当なことであつた」⁴²。ここにアタナシオスが、何に対抗して救済のみわざにおける神の善性を主張しているかが表れている。すなわちもし人間が罪を犯したために神の律法に基づく裁きによって滅ぼされるままであつたとすれば、神の創造のみわざが人間の怠慢、悪霊の欺瞞に負けてしまうことになる。それではまさに神の万物に対する支配よりも、人間の罪、悪霊の支配が力を持つてしまうことになる。したがって第六章で言い表されている、このような事態に対抗して働かれる神の善性とは、人間の存在を妬まないがゆえに人間が減びてしまうのを放置なさらない神の姿を指しているのと同時に、まさにその救済のみわざによって人間の罪や悪霊の支配をも含めたすべてのものを完全に支配しておられる神の姿を指しているのだからと考えられる。

さらにアタナシオスは『言の受肉』第一〇章一節で、救

済のみわざにおける神の善性を一つの譬え話によって言い表している。「この偉大な業は、ことのほか神の善性にふさわしいものであつた。実に、もし王が館か都を造営し、それが住人の怠慢のゆえに盗賊によって攻撃されたとしても、「王はそれを」けつして見捨てることなく、かえつて、住人の怠慢に目を留めることなく、むしろ自分の品位に關わることとして、自分の任務として防衛策を講じ、救済するものである。それ以上に、善の極みである御父の言である神は、ご自分によって成つた人類が腐敗の内に転落するのを見過ごしにされなかつた」⁴³。アタナシオスはここで神の姿を、ある国の住民が自分たちの怠慢のために盗賊に悩まされている時、その怠慢ゆえに彼らを見捨てるのではなく、自らの品位に關わることとして救済する王の姿になぞらえている。したがって救済における神の善性とは、人間をご自分の品位に關わることとして救済し、罪の滅びの中にある人間の現実に対してさえも王としてのご自分の支配を確立なさる神の姿を言い表している言葉であると考えられる。

第二節 神の真实性とは神の主権を肯定すること

①人間を救済するという目的に支配されない神の真实性
神の善性についてのアタナシオスの理解に見られる、神がすべてのものに対してご自分の支配を完全な仕方で確立なさる姿は、律法に対する神の真实性についての理解にも表れている。

アタナシオスは『言の受肉』^{ロムス}第七章一節で、神が律法によって定められた裁きに対して真実な方でなければならぬとして、その理由を次のように述べている。「というの
は、われわれの益のため、われわれの存続のために、真理の父であられる神が偽りの者と看做されるのは不条理なことだからであった」^註。ここで人間の益と存続のために神が律法の裁きに対する真实性を曲げるといふことはあつてはならない、と述べられている。つまりアタナシオスがなぜ神の律法の裁きが貫かれる必要性を覚えたかと言えば、人間が救われることが出発点になって、人間を救済するという目的に支配された仕方、神が律法に基づく裁きを曲げてしまわれることを問題視したからである。

この箇所をメイエリキングのように、神の真实性を神の律

法に対する首尾一貫性と捉えるならば、問題の焦点は律法に定められた裁きに対して神の側に矛盾があるのか、首尾一貫性があるのか、ということが問われることになる。しかしこの理解では、人間を救済するという目的に対して神がある距離を置き、そこでもご自分が主にして支配者であることを顕しておられる、という側面が捉えられないのではないか。

②神の真实性を顕す神の主権

この点に関して、E・ミューレンベルクも筆者と同じような仕方アタナシオスにおける神の真实性の意味を理解している。つまりミューレンベルクは『言の受肉』^{ロムス}第六章について論じながら、次のように述べている。「神の真实性とは、神ご自身の自己肯定であり、人間の反抗と自立に相対する神の主権 (sovereignty) を肯定することである」^註。ミューレンベルクはアタナシオスにおける神の真实性を、人間の罪に対抗して神がご自分の主権を肯定なさることと理解している。すなわち神は律法に基づく裁きを行なわれることによって、ご自分が主権者であり、だからこそ人間を救済するという目的に支配されるお方ではない

ことを顕しておられる。そこに神の眞実性が顕されているのである。

さらにこのような神が主権者であられるとの理解は、前述した神の善性の議論においても見出すことができる。なぜなら神はご自分の品位に関わることで人間を救われるのであり、まさにそのようなして王にして主権者であられるご自分の姿を顕しておられるからである。

結論——なぜ人間は悔い改めによってでは救われないのか

第一節 第一の理由の意味

アタナシオスが神の眞実性を論じる場合にも、神の善性を論じる場合にも、彼にとつて神は人間の現実の状況や人間の行動によつて左右されるお方ではない。むしろアタナシオスは次のように考えた。一方で神は律法の裁きに対する眞実性を貫徹なさることによつて、ご自分の主権を顕された。他方で神は裁きによる人間の滅びがご自分の創造のみわざを無にしてしまうという事態に対抗してその主権を顕され、まさに人間の存在を妬まない善性に基づいて人間

が救われる道を切り開こうとなさった。

したがつて神の眞実性と善性についてのこのようなアタナシオスの理解から、『言の受肉』^{コロス}第七章三節において悔い改めによつて人間が死への腐敗から不滅へと復帰することが神の眞実性にふさわしくないと述べられている意味が明らかになる。メイエリングのように、最初から悔い改めによつて救われる可能性を神が予告しておられないのに、後になつて悔い改めによる救いの可能性を認めるならば、神の首尾一貫性が損なわれてしまう、というふうに解釈すべきではないのではないか。神は律法の裁きを貫くことによつてご自分の主権を顕されたのであり、そのような神の主権に基づく裁きであるからこそ、人間がたとえ悔い改めをもつてしても変えることができるようなものではない、ということをおアタナシオスは言いたいのではないかと思われる。

第二節 二つの理由の関係

メイエリングは『言の受肉』^{コロス}第七章三—四節に述べられている悔い改めによつてでは救われない第二の理由を、悔

い改めが人間のもろさのしるしであり、そのような悔い改めでは滅びを乗り越えられないとアタナシオスが考えていたのだと解釈した⁽⁴⁶⁾。ところがアタナシオスはこの箇所
で、悔い改めは罪を抑制し得るだけであり、すでに墮落によつて人間が死への腐敗に捉えられ、神の像かたちにかたどられた恵みを剥奪されてしまったからこそ、悔い改めによつてでは解決しない、と述べている⁽⁴⁷⁾。つまりアタナシオスはここで悔い改めが内包するもろさを問題にしているのではなく、深刻な滅びの現実が悔い改めでは解決できないほどに人間を捉えてしまっているのだ、と言っている。

したがつてこの第二の理由についての解釈は、メイエリングよりもラウスの方が適切であると思われる。すなわちラウスは、『言の受肉』第七章では人間が悔い改めによつては救われないほどに、墮落の結果である死と腐敗が人間の実在の中に埋め込まれてしまったと述べている⁽⁴⁸⁾。

けれどもラウスのように第二の理由だけを取り上げてこの箇所を解釈するなら見えてこない事柄が、第一の理由と第二の理由との関係を視野に入れる時に見えてくる。すなわち人間が悔い改めによつてでは救われない理由は、アタナシオスの人間理解と関係があるのではなく、神の主権性

についての理解と深く関係しているのである。すなわち第一の理由で述べられているように、神はその主権を肯定するという真实性に基づいて、律法に背いた人間をお裁きになり、その結果人間は死への腐敗に捉えられてしまい、神の像かたちにかたどられた恵みは剥奪されてしまった。こうして神の主権に基づく裁きが真実に貫徹されたからこそ、第二の理由が述べるような神の裁きを受けた人間の滅びに捉えられた現実には、もはや悔い改めによつてでは救われ得ないほど厳しいものとなつてしまつていたのである。

そしてこのように神の主権に基づいて裁きを行なわれる神の真实性と、神の主権を顕すために人間を死への腐敗に放置なさらない神の善性は、神ご自身の他には誰も解決することができないデイレンマを生んだ。このデイレンマは人間の悔い改めも含めたどのような手段によつても解決されず、ただ言ことばが受肉してくださることによつてのみ乗り越えることができたアタナシオスは主張しているのである。

- (1) Cf. Louth, "The Concept of the Soul in Athanasius' *Contra Gentes / De Incarnatione*", *Studia Patristica* 13, 1975, pp.227-231 ; idem, *The Origins of Christian Mystical Tradition*, Oxford, 1981. (〔水落健治訳〕『キリスト教神秘思想の源流—プラトンからディオニシオスまで』〔教文館〕一九八八年)
- (2) 筆者はこのパースペクティブから『言の受肉』第七章前後の議論を見直し、『異教徒駁論』の内容と比較して考えるならば、両書における思想上の一貫性を論証し得ると考えている。しかしこの問題については、なほに別の論考において取り上げたい。
- (3) Cf. Meijering, *Athanasius, De Incarnatione Verbi : Einleitung, Übersetzung, Kommentar*, Amsterdam, 1989.
- (4) 『言の受肉』第七章三節(引用は小高訳「上智大学中世思想研究所編」『中世思想原典集成二』、盛期ギリシア教父)「平凡社、一九九二年」を使った。ただし R. W. Thomson, *Athanasius. Contra Gentes and De Incarnatione [Oxford Early Christian Text]*, Oxford, 1971 と Meijering と C. Kannengiesser, *Athanasie D'Alexandrie. Sur l'incarnation du Verbe [Sources Chrétiennes 199]*, Paris, 2000 を参照して一部変更した。
- (5) 『言の受肉』第七章三—四節。
- (6) Cf. Louth, 1975, p.228.
- (7) Cf. Meijering, S.375.
- (8) 『言の受肉』第二章五—六節。
- (9) Cf. Kannengiesser, p.267, n.2.
- (10) Cf. Meijering, S.72-73.
- (11) 『異教徒駁論』第六章二—一七行日 (Thomson, pp.14, 16 ; *Oi de apo tôn alipéōn, ékneōnres tēs ékkhliastikēs sūdoxakálias, kai pepi tēs níctiv neuvrygáwres, kai útroi jév úpórtawv tou kakou pagaporoúthwv eivai: ávteráttovrai de éavrois pagà tòv ánthrwv tou Xpoutoú Harépa θεού étepon, kai útrov áfévntov tou kakou pouptw kai tēs kakías ápxwv, tòv kai tēs ktióewς θηλυουγύwv.* など翻訳に際して Thomson の訳に P.Th. Camelot, *Athanasie D'Alexandrie. Contre les païens et Sur l'incarnation du Verbe [Sources Chrétiennes 181]*, Paris, 1946 と Meijering, *Athanasius, Contra Gentes : Introduction Translation, and Commentary [Philosophia patrum 7]*, Leiden, 1984 を参照した。
- (12) 『言の受肉』第六章三節。
- (13) Cf. Meijering, S.72-74.
- (14) 『言の受肉』第七章一節。
- (15) Cf. Meijering, S.69.
- (16) *Ibid.*, S.83.

- (17) *Ibid.*, S.74-75.
- (18) 『ティマイオス』29Bは次のように述べている。「創造者はすぐれた善きものであった。ところが、およそ善きものには、何事についても、どんな場合にも、物惜しみする嫉妬心は少しも起らないものである。そこで、このような嫉妬心とは無縁だったので、創造者は、すべてのものができるだけ、創造者自身によく似たものになることを望んだのであった」(『ティマイオス』二九D—二九E) [J. Burnet, *Platonis Opera*, vol.4, Oxford, 1962; ἀγαθός ἦν, ἀγαθὸς δὲ οὐδέ τις περὶ οὐδένοσ οὐδέποτε ἐγγύγιεταί φθόροσ; τοῦτοσ δ' ἐκτόσ ἀν' αὐτῶν ὄντ' ἀλλῶτα ἐβουλόθη γενέσθαι παρ' ἀλλήωα ἑαυτοῦ, ταύτην δὴ γενέσθωσ καὶ κομωσ μάλωτ' αὐτὶσ ἀρχῆν κρυπυτάτην παρ' ἀπόσων φρωσίωσ ἀποδέχομενοσ ἀπόστορα ἀποδέχοιτ' αὐ]. 引用は種山訳「種山恭子・田之頭安彦訳、『プラトン全集』二、ティマイオス、クリテイアス」岩波書店、一九七五年」を使った。ただし Burnet を参照して一部変更した。
- (19) 『言の受肉』第三章三節 (Kammengjesser, p.270; 'Ο θεὸσ γὰρ ἀγαθὸσ ἐστὶ, μάλλωσ δὲ τηγὴ τῆσ ἀγαθότητοσ ὑπάγει; ἀγαθὸσ δὲ περὶ οὐδένοσ ἀν' γένωτοσ φθόροσ; ὁσεν οὐδέτι τοῦ ἐταίω φθωρήωσ, ἐξ οὐκ ὄντωσ τὰ πάρα ποιοίηκε οὐκ τοῦ ἰοίωσ λόγω τοῦ κρυπτοῦ ἦτωσ Ἰησοῦ Χριστοῦ)。
- (20) Cf. Meijering, S.50.
- (21) *Ibid.*, S.51.
- (22) *Ibid.*, S.76-78.
- (23) 『言の受肉』第六章八節。
- (24) Cf. Meijering, S.76.
- (25) *Ibid.*, S.76-77.
- (26) *Ibid.*, S.83.
- (27) 『言の受肉』第一章一二節。
- (28) 『言の受肉』第一章四節を参照。
- (29) 『言の受肉』第二章一二節を参照。
- (30) 『言の受肉』第二章三四節を参照。
- (31) 『言の受肉』第二章五—六節を参照。
- (32) 例えばカンネンギーサーによる『言の受肉』の校訂本の脚注では、「マルキオン」の項目に第二章五節以下の箇所が指示されているだけである。 Cf. Kammengjesser, p.479.
- (33) Cf. Meijering, S.50.
- (34) Cf. *supra*, n.19.
- (35) Cf. P. Widdicombe, *The Fatherhood of God from Origen to Athanasius*, Oxford, 1994, pp.149-150.
- (36) 『言の受肉』第二章四節を参照。
- (37) 『言の受肉』第二章一節を参照。
- (38) 『言の受肉』第三章一節。
- (39) Cf. Meijering, S.51.
- (40) 拙稿「中期プラトン主義とオリゲネスにおける神の善性」

『キリスト教と文化』（関東学院大学キリスト教と文化研究所紀要）第六号、二〇〇七年を参照。

- (41) Cf. *supra*. n.24.
- (42) 『言の受肉』第六章六節。
- (43) 『言の受肉』第一〇章一節。
- (44) 『言の受肉』第七章一節。
- (45) Cf. Mühlenberg, “Vérité et Bonté de Dieu : Une interprétation de De Incarnatione, chapitre VI, en perspective historique”, *Politique et Théologie chez Athanase D’Alexandrie*, Kannengiesser (éd.), Paris, 1973, p.218.
- (46) Cf. *supra*. n.25.
- (47) Cf. *supra*. n.5.
- (48) Cf. Louth, 1975, p.228.